

「経済学文献季報」について (2)⁰

木田橋喜代慎^{*}

- | | |
|-----------------|-------------|
| (1) はじめに 前号 1 頁 | 2. 収録論文数 3 |
| 1. 冊子目録 3 | 3. 分類について 6 |

4. 著者別索引: 創刊当時としては、この著者別索引を付するということは大変なことであったと思うし、また著者別索引をつけたことを強調⁰しているのも尤もなことである。しかし国民経済雑誌等の文献月報や神戸高商、神戸商大の文献目録は別としても、天野、論文総覧の追篇(昭3)には既に執筆者索引が付されており、また国立国会図書館の雑誌記事索引(雑索)人文科学篇 第7巻(1954)には件名配列と著者索引のどちらからでも引けるようになっている(その後変って、年刊1回の著者索引がつく)。また大阪商大の経済学文献大鑑にも著者名、事項の索引が付されているのを見落されたのだろうか。季報における分類では著者別索引をもたないということは考えられないことであったと思う。

1) 被伝記者あるいは標題に表記されている人名: これを著者別索引に組み込んでおいたことは賢明であったというべきであるが、既に天野の論文総覧、神戸の文献目録にも索引されていた。季報も創刊からではなく、5(1957)からなされている。

この被伝記者の表示は人文・社会科学の領域において特に重要な意味を持つことは、マルクス研究、ケインズ研究という単行本の出版やまた、雑誌論文において極めて多いことから推測できることであると思う。また単に論文に限らず、たとえばフランス国立図書館の *Catalogue générale des livres imprimés: Auteurs.* の *Walras, Auguste* をみると著作と同様に *ANTONELLI (Étienne). Un économiste de 1830, Auguste Walras. Paris (s. d.). (Extrait de la Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales, 11^e année, no. 4, 1923)* と *Extraits divers. Correspondance ... Voir LEROY (Louis-Modeste). Auguste Walras, sa vie, son oeuvre. Paris, 1923.* が掲載されている。この両者はいずれもワルラス研究の基本的なものと聞いている。もちろん研究者にとっては単に標題中に表示された人名に限らず、その内容よりみて真に関係ある文献を、一専門辞典類の参考文献のよ

* きだはし きよなり 北海学園大学図書館学課程講師

うに一挙ぐべきであろうが、それは専門の更に専門的なものとなろうから触れないことにし、この被伝記者名については研究上の必須のものであろう。

2) 取捨の基準: これらの被伝記者の取捨については、編集上一定の基準があると思うが、64/65 (1972) について調査してみた。

A. 索引されているもの (季報)

日本文献

- ① Phillips, A. W.: フィリップス曲線 (# 165)
- ② Keynes, J. M.: ケインズ体系を中心として (# 160)
- ③ ,, : ケインズ革命 (# 355)

欧米文献

- ④ Arrow, K. J.: Arrow's theorem (# 2636)
- ⑤ Akerman, J. G.: Akerman-Wicksell model (# 2681)
- ⑥ Wicksell, J. G. K.: ,, (,,)
- ⑦ Samuelson, P. A.: After Samuelson, who needs Adam Smith? (# 2902)
- ⑧ Smith, A. : ,, (,,)
- ⑨ Schumpeter, J. A.: Paradoxes of Schumpeter's zero interest rate (# 2677)

注: 便宜上論文標題を省き人名に接続する語句のみにした。

B. 索引されていないもの (季報) (比較の際、明瞭ならしめるため×印を付した)

日本文献

- ×⑩ Keynes, J. M.: ケインズ体系とワルラス法則 (# 184)
- ×⑪ Walras, L.: // (//)
- ×⑫ Trotskii, L.: いわゆる「トロッキズム」の性格 (# 87)
- ×⑬ Keynes, J. M.: 1つのケインズ派成長モデル (# 281)
- ×⑭ ,, : ケインズの「管理通貨制度」 (# 305)

欧米文献

- ×⑮ Walras, L.: teoria walrasiana della capitalizzazione (# 2651)
- ×⑯ Marshall, A.: La economie esterne marshalliane (# 2651)
- ×⑰ ,, : Marshallian partial equilibrium analysis (# 2662)

以上の各論文についてみるとその採用あるいは不採用の区分が判然としないのではないだろうか。これに対し International Bibliography of Economics. (IBE), Vol. 20 (1971) についてみる。

C. 索引されているもの (IBE)

- ⑱ Keynes, J. M.: neo-Keynesian doctrine (# 499)
- ⑲ ,, : The Keynesian revolution (# 4813)

- ⑳ ,, : Two Keynesian models (# 4899)
 ㉑ ,, : Keynessche und neoklassische Verteilungstheorie (# 5343)
 ×⑯⑳ Marshall, A.: La economie esterne marshalliane (# 490)
 ×⑰㉑ ,, : Marshallian partial equilibrium analysis (# 1656)
 ×⑮㉑ Walras, L.: teoria walrasiana della capitalizzazione (# 465)

注：⑯—㉑の掲載誌は季報採録誌中になし，㉑は62号に採録されているが，Keynes からの索引はなし。

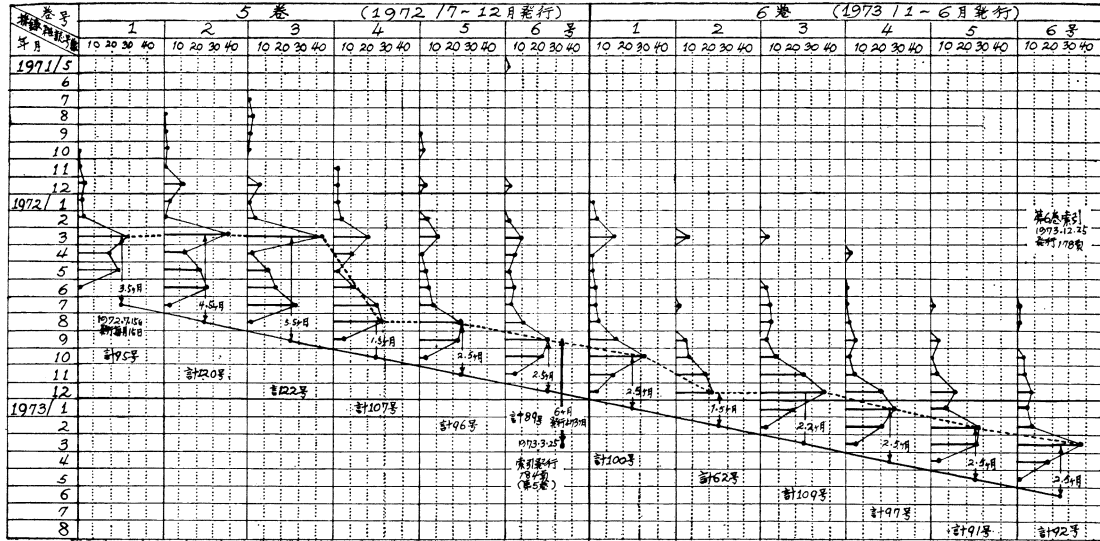
以上についてみると日本と欧米文献との間に開きがあるようにみられる。また一方 I B E は画一的に採録しているように思われる。これは何んといっても編集の際に判断の余地を与えない方が，時間的にも短縮できる方法ではないだろうかと思う。またマルクス，ケインズ等が単に人名のみではあまりに多く，利用者にとっても繁雑であると考えれば，特例を設け，Marx, K. のほかに Marx, K. (主義)，Marx, K. (経済学)，……，Keynes, J. M. のほかに Keynes, J. M. (革命)，Keynes, J. M. (派)，……と表示するのも一方法であろう。しかし一方，Bibliographie der Sozialwissenschaften, Göttingen. は Jg. 59 (1967) まで XV Bibliographien, Biographien, Festschriften, Handbücher の綱に表示されていたが，しかし索引には加えられていない。その後，改題になった Bibliographie der Wirtschaftswissenschaften (BdW). Göttingen, Jg. 60, 1968 (1971) からは各綱ごとに Bibliographien und Handbücher となり Biographien が除かれ，何らの措置も講じられていない。ついで Jg. 61, 1969 (1972) には Jg. 59 (1967) とまったく同じ形で B として，各綱に備けられているが，散見したところでは単行図書のみようで，しかも索引には被伝記者より索引されていない。もちろん編集方針によるところであろうが遺憾なことである。

5. 速報性：比較する文献集，たとえば国立国会図書館の雑誌記事索引（雑索），あるいは I B E の欧米・ソヴェト文献とによるべきであろうが，これには極めて多くの時間を要すものと考え，分野は別ではあるが，日本農学図書館協議会，日本農学文献記事索引（日農索）とについて検討してみる。

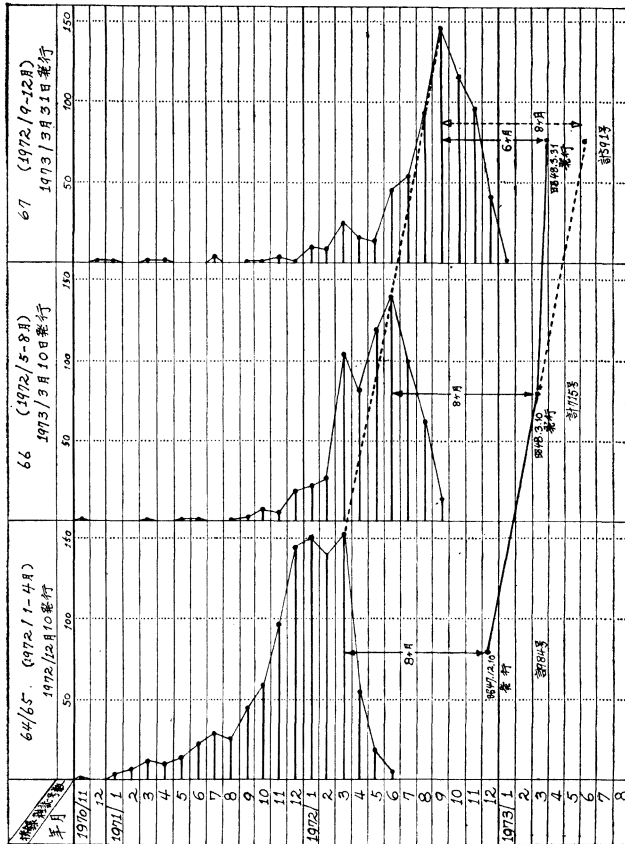
しかしこれも，編集形式が異なり，さらに月刊であり，それに引きかえ季報は年3回の発行であるが，採録編文についてみると，日農索 第5，6巻（1972/1月～1973/6月）の1ヶ年の採録論文は5,003編で，季報（1972年）の採録編文は5,430編であるので対照としてとりあげた。（第1，2図）

日農索，季報の各号に採録された各誌の号の発行月ごとに集計した。本来は採録論文によるべきであろうが，極めて困難が予想されたので，止むなく号数によった。

第1図 日農索の採録雑誌月別号数と発行月日 (日本文献よりなし)



第2図 季報・採録雑誌月別号数と発行月日 (日本文献)



日農索は採録誌5巻, 302誌で, 合計号数629号, 6巻, 290誌で, 合計551号である。

季報の日本文献採録誌(1972年)は491誌で, 64/65号には984号, 66号は715号, 67号には591号の採録雑誌の号数の論文が採録されている。

第1図の日農索についてみると, 最も多く採録されている号, たとえば5巻, 1号について, 1972/3月発行のものを中心としてみると, 発行までの間隔は約3.5月となり, また新しい雑誌, 極めて少ないが(全体としても), 6月末のものとするれば, 僅か半月後に発行され, またトップの3月発行のものと一緒に5月発行のものからは1ヶ月半より隔っていないことがわかる。

通覧するに12号のうち2ヶ月半以下のものが9号を占めており、これ以上は望むことのできない速度でないかと思う。しかしこの日農索は1号毎に著者索引もない不便さはあるが、5巻、6号(12月15日)発行より4ヶ月半後には半年分の索引(人名索引日本、外国、団体、件名索引50音順、外国名、採録誌名巻号索引)を用いることができるということはそれほど不便でもあるまい。

本季報についてみると、採録号2,290号と日農索の2.5倍であるので、その処理量も大変なことと思うが、トップの号数のものから約8ヶ月後に発行されている(64/65, 66号)⁹⁾。また最も新しいものよりの間隔もそれぞれ約5ヶ月を経過している。67号の発行が66号発行後僅か3週間後3月31日の発行であるが、これは特別な、たとえば年度末等の事情によったもので、編集に携わる方々の不眠不休の作業であったことと考える。推定してみると下部点線の6月頃発行の作業量であったと思われる。

しかし社会科学系では理科系におけるほど新しい文献の入手を切望されているとも思われない(しかし真に必要な研究者は諦めて、昔しどおり、莫大な時間をかけて調べ続けているのか)。

したがって私はこの速報性をそれほど重要視はしない。それと同時に半年、または1年を経過するごとに遡及探索となり、またなりつつあるので、なんといっても網羅的であり、同時に時間のかからない適確さに重点をおくべきであろうと考える。

6. 図書の採録: Bibliography あるいは書誌というと単行書を中心としたというニュアンスが浮んでき、Index というと雑誌論文に用いられるようで、さらに文献というと、この双方が収録されているように受けとめられる。季報も日本文献については軌を一にしている。しかし編集の消力化のためにも図書を割愛するべきであろう。前編第2表のとおり1972年収録図書(日本文)1,240点で、この内には官庁刊行物を初め研究図書(教科書類を除く)が収録されているが、これが研究上必要図書が網羅されているとも考えられない。

これら図書に関しては、出版ニュース、出版年鑑、国立国会図書館の納本週報、全日本出版物総合目録等によって補い得ないものだろうか、そして年間の採録作業量の30%¹⁰⁾位になるとのことであればなおさらのことで直ちに省くべきではないかと思う。しかしこれは筆者がいうまでもなく既に協議会議事として検討され¹¹⁾、また『記念論文集、全集、講座等の分担執筆ものは積極的にとり分出す。記念論文集のみをとる』¹²⁾。と提案され、さらに『分担執筆形態の論文集は確実に補足採録するとともに、採録範囲の拡大についても検討する必要が説かれた』¹³⁾。と記録されている。

図書を除くといっても、この記念論文集は当然採録を要するものであろうし、全

第1表 季報における日本・外国文献の占める頁数と採録文献数

区 分	64/65			66			67号			計		
	使用頁数		採録文献数	使用頁数		採録文献数	使用頁数		採録文献数	使用頁数		採録文献数
	本文	著者索引その他	頁	本文	著者索引その他	頁	本文	著者索引その他	頁	本文	著者索引その他	頁
日本文献	89	34	2,559	80	21	2,243	67	18	1,872	309	6,674	46.4
欧米・ソヴェト	70	26	2,074	87	24	2,625	76	20	2,267	303	6,966	41.5
ソヴェト	20	6	497	23	7	581	25	7	662	88	1,740	12.1
欧・ソ文献計	90	32	2,571	110	31	3,206	101	27	2,929	391	8,706	53.6
合 計	179	66	5,130	190	52	5,449	168	45	4,801	700	15,380	100.0

注：使用頁数には目次、凡例（日、英）、分類表のものを除いた。

集・講座類その他、いわゆる分担執筆の編書の論文はほとんど総説論文（Review article）であり、引用文献も極めて多く、啓蒙的で有用なものであり、また現行の図書目録規則にも看過されているように見受けられ、専門分野において開発すべき性質を有するもので、分出は必要欠くべからざるものと思う。

しかしこれも編集の作業量に左右されるものでその方針に待つよりほかに仕方がないと思う。

以上、本季報についての細部にわたる点に注目したもので、したがって従来の編集形式を大きく変更することなく継続し得ると考えるが、あまり負担の軽減にはならないし、場合においては多くなることも想像される。

本季報が今後本邦唯一の経済学文献索引誌として、名実ともに研究者の必備のツールとして継続刊行を期待し、したがって作業量の軽減と、利用面について述べてみたい。

7. 外国文献の割愛：季報64/65—67号（1972年分）分文献として採録されている冊子頁数ならびに文献数の占める割合は第1表のとおりである。しかも日本文献頁数において44.1%、文献数においても46.4%といずれも欧米・ソヴェト文献の半ばに満たない状態である。

したがってなにを目処としているのか、日本文献なのか、また外国文献なのか、はたまたその両方の適当なところを目処としているのか判断し兼ねるところである。

この欧文の作業量はたとえタイプするにしても莫大なものであろうことは想像に難くない。それによってか、編集者あるいは関係者によって、前掲協議会ニュースにしばしば検討された模様が伺がわれる。

「外国誌欧文をやめる、ロシア文をやめる。」(No. 11; 1, 1972), 「外国誌の採録(それぞれ自国の索引誌が出来ており、誌数の激増もありこの際、中止することも考えられる。)(No. 13; 7, 1972), また「雑誌の採録分野を中心とする学術誌に重点をおき、欧米誌の選択をきつくし、ソ文献は誌数を減少する。」(No. 14; 1, 1973), さらに「外国誌の採録: 歴史専門誌を中心に20誌を採録からはずした。」(No. 15; 7, 1973), ところが、採録誌を減らすことには「境界領域が広がっていること、経済、経営分野の学術誌でまだ採録していないものもあること、また新雑誌が増加している現状に逆行する」点などがつかれ、「歴史専門誌(洋)がおとされたのは問題」との意見などに対して、(i)ユーザー会議を開いて意見を聞く。(ii)同分野の他種インデックス誌との交流と比較検討の必要などの意見が出され編集委の検討にゆだねられた。」(No. 15) とかつて検討され、また今日でも目下協議されていることである。

しかし発言のうちには全体の見とおしのうえに立っているものではなく、また季報の内容編集そのものに触れているものでもないように思う。

現在われわれが割に簡単に入手できるものとしては、IBE のほか780誌の採録誌を有する *Bibliographie der Wirtschaftswissenschaften*. Göttingen, 120 余誌の採録誌の、*Index of Economic Articles*. Homewood, Ill., 170 誌の *Business Periodicals Index*. New York, あまり採録誌その他で網羅的ではないが *Bibliographie d'économie politique ouvrages français*. Paris があり、また *The Journal of Economic Literature*. Menasha, Wis. は四季誌で毎号約180誌 (Vol. 12, No. 2, June 1974) の内外誌のコンテンツが掲載されている。かつてコンテンツ誌としては *Current Contents: Behavioral, Social & Management Sciences*, Philadelphia. Vol. 1 が1969に誕生したが、Vol. 3. (1971) から *Current Contents: Behavioral, Social & Educational Sciences*. と改題されてしまった。これは供給と需要のアンバランスのせいではないだろうか。

さらに1973年創刊の *Social Sciences Citation Index*. Philadelphia は創刊当初社会・人文科学22分野の学術雑誌(文学・芸術はない)、1974年にはこの雑誌以外に約2,000誌より社会科学に関連ありとする論文を選んで索引され、年間約70,000点以上の新しい論文(単行本も)索引が刊行され始めた。

採録分野のうち関係のものをあげてみると、経済学、国際関係、人口統計、法律、地域研究、社会学、事務と財務、経営学、統計学、マーケティング、都市開発、歴史、情報・図書館学、政治学であるが、その他に人類学等12領域を網羅している。すべてコンピュータ処理によるものである。この誌は誌代が高いので、地区ごとに（できれば国立大学で）1校が購入して閲覧の方途を講ずべきだ。札幌では北大が購入していて閲覧可能（Science Citation Index とともに）。

以上の外国文献の存在する現在、さらに屋上屋を架する必要がどこにあるだろうか、やがて棄てざるを得ない外国文献を切り、道の一つにしぼってはと考えるのは筆者だけではないだろう。

8. 編集形式の変換：現在の季報の編集の第1に採録論文のことごとくを手書き（これより早い記入方法がないのだろうか）にしているようであるが、これも止むを得ない方式であろう。しかし考えてみると、現在の図書館業務の中でもワン・ライティング・システムとして、数枚のコピーを作り、これを多角的に利用し、省力を押し進めている昨今、現に目次がいかなる雑誌にもついている、それを利用、複写し原稿として使用のうえ、これに著者と件名索引を付する方法を採用してはと思うものである。

この件名索引については季報に関する多くの文献を引くまでもなく、将来どうしても作らなければならない課題の第1位に位すると思われるからである。筆者はここまであまり欧米、ソヴェト文献に触れなかったことも、やがては除かれるであろうと思われたからでもあり、ここでも当然除かれることを前提としている。

現在ですら困難を来しつつある編集業務にさらに加重となり、あるいは季報の継続を危くするようなことは厳に慎まなければならないからである。

1) 誌名下目次方式：仮にこうしておくが、前編(1)の第1表の3)と⑤、⑥に該当するものと思うしました、これがまず索引と称し得るものではあるまいか。

著者名と書名（論文名）の既知のものを引くということは、あるか、またはないかをチェックすることになり、検索または探索という意味には該当しないと思う。ある主題について未知なるものを探し出してこそ探すという意味が生じ、索引たるの実を發揮し得ると思う。

この方式は古く、しかも新しい方式であると思う。知る限りでは Current List of Medical Literature. Washington, D. C., Vol. 1 (1941-1936) (1959) がこの方式を用い、著者索引と件名索引が付されていた。ついで Index Medicus. Washington, D. C., New series, Vol. 1 (1960) に引続いてコンピュータにより出版され現在に至っている。

国内では先に触れた日本農学文献記事索引（月刊）（日農案）がこの方式を用い、

半年に1巻(6号)の発行後約3ヶ月で索引(人名29頁, 件名146頁の索引 各号には索引はない)が発行されている。(第1図参照)

また富士短期大学の月刊文献ジャーナルが, 各大学の雑誌(紀要)と学会誌の141誌(文献1,043編, 第13巻, 第10号(10, 1974))目次を掲載し, 一切の索引は付されていないことは知られている。前に触れた The Journal of Economic Literature も, Contents of current periodicals 欄を50—60頁をさいてこれにあてているが, そのうち抄録されたもの以外は著者索引にはない。学会あるいは市販の雑誌にも同領域の雑誌のコンテンツ掲載されているものがあり, わが国の大学発行の雑誌にも掲げられているものがある。

こうしたことから, 誌名下にその号の目次を掲載する方法も悪くない一方法でもあろうかと思う。現に札幌市近郊の数校の経済学関係図書館では自館で購入していない雑誌のコンテンツを館毎に申込のうえ交換し, 送付されたコンテンツを綴り込んでおくと一応コンテンツについては所蔵なみに閲覧できることを実施している。

i) 目次方式のメーン: このメーンを単に誌名順にするか, あるいは大まかな分類によるかは考慮を要することと思う。いま日農索の6巻, 1号(1973—1)(本文36頁, その他X頁)についてみると, 79誌を農学一般(10誌), 農業経営(2), 農学(14), 化学(3), 食料(5), 農業工学(4), 蚕糸(3), 畜産(9), 林学(17), 水産(4), 基礎科学(5), その他(3)となっている。

あるグループの雑誌を通覧することを考えれば, これも一つの方法であると思う。またこの方式であると, メーンの配列に相当のスペースを必要するように考えられるので試算してみた。第1, 2表と比較してみると, 季報の1頁当りの文献収容数は日本文献309頁に対し1頁当たり21.6アイテム, これは表の注記にあるように著

第2表 日農索の頁数と採録文献数

区 分	本文頁数	人名索引 そ の 他	計	索引 [※] (件名のみ)	合 計	採録文献 数
5巻 1—6 (1972/7—12)	236 ^頁	52 ^頁	288 ^頁	150 ^頁	438 ^頁	5,055 ^冊
6巻 1—6 (1973/1—6)	228	52	280	144	424	5,003
計	464	104	568	294	862	10,058

注: ※索引には人名・件名・誌名等があるが, 比較のため件名索引のみの頁数とした。

者別あるいは日農索では人名索引(事実これは索引に含まれているが)も加えてである。欧・ソ文献291頁に対し1頁当たり22.3アイテムとなった。これに対し日農

索は（第2表）5巻で288頁に対し1頁当たり17.6アイテム、6巻の280頁には1頁当たり17.9アイテムとなり、大体2割減位に止まった。しかしある誌の1、2論文を採用する場合は、全部を掲げて、The Journal of Economic Literatureのように何らかの印をつけるか、または採録するものみにするかは研究の余地があると思う。

いずれにもせよ、欧・ソ文献で現在頁数の約56.8%を占めている現状からすれば、仮に日農索の索引を含めた1年分862頁に1万アイテムの文献を採録する可能があると思う。

ii) 編集方法：かつて筆者がある医科大学に勤務の際、医学文献索引の刊行について検討を迫られ、種々計算の結果、この方式が一番手数のかからない、つまり時間、経費のかからないという結論を得た経験がある。いま当時のデータについて持合せがないが、日本文献、日本の欧文誌、著者・件名索引を含むものであったが、これはついに実現するに至らなかった。

文献名を手書きすることを極力避け、各誌の目次をクティック、あるいはゼロックスにて複写し、本文と照合、必要頁数等を記入し、定期メ切までのものを配列、文献番号を打ち込み、さらにこれをもう一部複写し、印刷所に渡し、印刷中に人名、件名、（これは後で述べるが、該当するキー・ワードに赤線等を施し、適当なカードに書き込む）を作成し、索引とするということである。

昨年日農索の編集者と種々懇談する機会を得たので、この点に触れたが、専任の編集者は目次と本文の標題等が著しく違うので、原稿にはならず、ことごとく手書きするとのことであったが、照合のうえ多少の訂正記入等については時間的にみて問題ないと思う。

2) 補助索引：この方式によってメーンが雑誌の目次によるとすれば、いわゆる分類というものは消退を迫られてくる。

「季報」が補助索引として人名索引しか作っていない点が利用者側からいえば文献探索上の限界になっていることはすでにのべた。（ユネスコの上記索引誌（IBE）は、私どもに不馴れな分類によっているが、それを補って余りある件名索引がついている。）もっと一般的にいって、図書館におけるカード分類が何方式によって行なわれていようとも、利用者にとって決定的な問題ではない。極端な表現になるが、要するに、検索に便利であることが大切なのである。】⁹

また経済資料協議会の創立20周年記念の和気あいあいの座談会に、「消費函数」について調べたい。また大学院の学生が非常によく使う。研究者の使い方は、たとえば「国民所得に関する文献」をと思うが、どこに入っているか分らないので、全部見なければならぬ、時間がかかるので、大学院の学生に下請けさせる。結局関

係ある分類項目を全部みなければならぬので不便である。Subject か何かの索引で簡単に出てくるようであれば便利である。といった発言がある⁹⁾。

さらに「分類に問題があるが、これも重出を徹底的にやるが、件名索引があれば、ある程度検索の困難は避けられるが、実際はないために、非常に検索し難いものになっている等の欠陥を持っている」¹⁰⁾ これらは、本季報の致命的なもので、何にをさておいても検索し易い方途を講ずべきであり、知り得た著者名からの文献を引くことは、検索でも探索でもなく、繰り返していうが、それは単なるチェックすることである。未知なる文献の「消費函数」、¹¹⁾「国民所得」といった諸文献の所在を迅速、適確に知ることこそ、索引の効用であろう。

i) 著者別あるいは人名索引：従来の考え方からすれば、被伝記者名は、件名に組み込まれるべきであるが、季報の現在のとおり、著者別索引に入れるのも一方法であろう。

ii) 件名索引：この索引の作成はどんな形にせよ、つけなければ索引誌としての生命を危うくするものであることは明らかである。件名索引というとわれわれは図書館業務における件名標目表を想記し、その訂正、修正、増補を考え、まず“Subject Headings used in the Dictionary Catalogs of the Library of Congress. 7th ed. Edited by M. V. Quattlebaum. Washington, Library of Congress. Subject Cataloging Division, 1966. viii, 1432 頁の膨大な標目と月々の修正・増補版、さらに1年間の累積版それに数年間の増補累積版と目を見はるわけである。この件名標目、“見出し語”のABC順配列もさることながら、図書カード目録と、冊子目録との形態上の相異と、時代的に敏感な諸文献をどう指示するかということなどを考え、まずIBEの件名索引についての仕組みを分析してみることにする。

第3表 IBE 件名索引に用いられた各標目の種類

	普通標目	地域・国家名標目	計	人名標目 (被伝記者)	みよ・をも みよ参照	合計
	アイテム	アイテム	アイテム	名	アイテム	
①主標目	712	124	836	63	177	1,076
②細標目 1	508	2,204	2,712	—	171	2,883
③// 2	12	769	781	—	7	788
	1,232	3,097	4,329	63	355	4,747

普通標目の区分例

- ① Banking
- ② institutions central: 1506, 5029-034; ③ other public, 5065; ③ private, 5053-5044

地域・国家名標目の区分例

- ① Africa
- ② agriculture: 3204, 3330;
- ③ land tenure, 3291, 3300
- ③ reform, 3397; research, 3146

a) IBE 件名索引: 実際に使用されている標目(見出し語)を計算してみると第3表のとおりである。全体の数として4,747アイテムと莫大な数に見えるが、普通名詞としては僅か712アイテムで、次に細区分されているのが508アイテム、それをさらに細区分しているものが12アイテムとなっている。(第3表)

試みに主標目①(712アイテム)とIBE分類の綱、項につけられた名称とどんな関係を持つかについて調査した。一般的に検討する余裕がないのでA—Eまでの96アイテムについてあたる。(第4表)

第4表 IBE 件名索引標目と分類綱項の名辞との関係

分類の綱項の区分	H	H. 1	H. 11	H. 111	H. 1111	H. 11111	計	%
①件名索引・分類綱項につけられている名辞の完全一致のもの	1	11	19	21	15	8	75	78
②半ば類似のもの			3	3	1		7	7
③不一致のもの			2	4	6	2	14	15
計	1	11	24	28	22	10	96	100

注:A—Eまでの索引の普通標目(地域・国家標目に対して)のもの、分類の項の区分のH, H. 1, …は綱(H)の第1, 2桁, …を明瞭にするためHとは関係ない。

これによると、全体として78%のものが分類に使われた見出し語と同じもので、半ば類似のものを含めて一致していないものが、22%となっている。

次に件名索引の標目と文献に用いられ、しかもKey Wordとなったものについての適合がどの位になるかについては、他日にゆずるが、この作業中に感じたことは案外合致するものが多かったように思われた。

また地域、国家名の標目についてみると、124アイテムの地域・国家名に対し約20倍の②細標目1の2,204アイテムが付されているが(第3表)、これも第5表1地域、10ヶ国によって細標目1の全体2,204アイテムの41%も占められ、③細標目2の全体769アイテムについては60%に達している。

細標目1の最も多い、フランスとアメリカ合衆国についての細標目1がどう組み立っているかについてみると(第5表)、フランス、アメリカ合衆国ともにagriculture-Working conditionsまでこの間にフランスは123、アメリカ合衆国は118アイテムの細標目1があり、また細標目2の最も多いソヴェトはAgriculture:

bookkeeping から Wholesale の Yugoslavia まで72アイテムの細標目2がある。

第5表 地域・国家標目の細標目数（1地域，10カ国）

① 本 標 目	② 細標目 1	③ 細標目 2	計
	アイテム	アイテム	アイテム
カ ナ ダ	56	19	75
フ ラ ン ス	123	51	174
西 独	92	51	143
イ ン ド	69	23	92
イ タ リ ー	83	38	121
日 本	59	27	86
ラテン・アメリカ	52	17	69
ポ ー ラ ン ド	79	51	130
ソ ヴ ェ ト	95	72	167
イ ギ リ ス	82	53	135
アメリカ合衆国	118	71	189
	908	473	1,381

その国の特殊事情はあるにせよ，これらに使用された標目が他国に繰返し使用されていることは間違いなく（第6表），数のみで驚くことはないと思う。双方で約60%内外が全く同じ標目が用いられている。

第6表 IBE の件名索引の国家細標目1のフランスとアメリカの比較

フ ラ ン ス の 項		ア メ リ カ 合 衆 国 の 項	
全く同じ標目	75		75
フランスのみにある標目 building industry chemical ,, commerce commercial enterprise		アメリカ合衆国のみにある標目 Alliance for Progress antitrust brewing industry business cycles customs policy	
ほか	計 48	ほか	計 43
合 計	123		118

これら通覧したように，なかなか評判のよい IBE の件名索引であるが，それほど複雑多岐にわたるとも思われない。ある部厚い手引き書を読んでからでは引けないようでは，これも，いくら仕組みがよくできていても，引く方が面倒であること

は避けなければならない。

また一方 IBE の件名索引の1標目下のもとに指示された文献数が合理的であろうかと考え、多いものを拾ってみた。(第7表)

第7表 IBE 件名索引の1主・細標目下の文献指示数

区 分 標 目	① 1主標目 下の文献指示数		② 1細標目下の 文献指示数	
	個々の 文献指示 点	グループ 文献指示 点	個々の 文献指示 点	グループ 文献指示 点
① Economic development				
② concept and general theory			74	101(1)
① Economic planning				
② under collectivism			36	39(4)
① Economic thought	39	43(2)		
① Forecasting	47	84(1)		
① Foreign trade				
② descriptive studies			12	91(1)
① Models, economic	45	4(1)		
① Underdevelopment	114	133(1)		

注：第3表の普通標目には③細標目2は12アイテムよりなく、ここにあげた標目には該当するものがない。43(2)は467—506, 4808—4810と指示している、文献40, 3計43を2個所において指示していることを示した。

1主標目のもとに114アイテムの文献を指示し、そのほかに1414—1546と133アイテムの文献を指示している。これは分類の下 Economic activity; F. 3 Structures; F. 32 Underdevelopment の F. 320 General studies と F. 321 Local studies の2項にわたる全文献である。こういう索引のとり方、あるいは1標目のもとに114アイテムもの文献番号を羅列することは索引の働きを喪失せしむるものであろう。

b) 標題に表現された Key Word の活用: IBE の件名索引に用いられた標目(見出し語)が、分類の標目と相当一致するものがある。これがさらに文献の内容に盛られた主題に密着、合致するとすれば、これ以上の適確さはないこととなろう。

さらに数歩を進めてタイトルに表現された語と、研究者(探索者)が欲し、たとえば「消費函数、あるいは「国民所得」という表現が主題とみられるものであるとするならば、同義語とか、その他いろいろの条件があったとしても、まずこれを提供してしかるべきではないだろうか。

KWIC 索引はこの点について一つのエポックを劃するものであったと思う。「著者は、自分の論文の検索に役立つような言葉をできるだけ多くタイトルの中に入れてようになってきています。」¹⁰ ということは、事実としても、必ずしもそうばかりはいえないが、筆者等が刊行した KWIC 索引¹⁰ と Library of Congress の件名標目との比較を企図しているが、種々考えて与えられた件名標目も、却って引き難いものもあることは事実である。

さてこうしたタイトルに用いられた語を「標目あるいは見出し語」として索引を作成していたことは、古い時代から採用されていた。The Economic Journal London の Vol. 1, No. 1 (March, 1891) の次の3論文についてみる。

1. Rae, J.: The eight hours day in Victoria. 15-42 p.
2. Mayo-Smith, R.: The Eleventh census of the United States. 43-58 p.
3. Seebohm, F.: French peasant proprietorship under the open field system of husbandry. 59-72 p.

これらの論文が Index to the Economic Journal. Vols. 1-10 (1891-1900). London (1901) に、しかも F. Y. Edgeworth と H. Higgs の編集にかかるものである。もちろんこの有名な経済学者が自ら作ったとは思われない。Miss E. Faraday が prepared と序文にあるが、その方針なり、基本的な技法は指示したものである。

- 1) Eight Hours' Day: Government Works, i. 25;—Eight Hours' Day in Victoria, History, i. 16, 19;—
- 2) Census:—Census, United States, description of Schedules, i. 47, 54; Vital statistics, i. 47, 52.
- 3) Peasant Proprietors:—Peasant Proprietors, French, i. 59. Open Field System, French: Middle Ages, i. 63; Peasant Proprietors, i. 60; see Peasant Proprietors.

この雑誌の累積索引は稀にみる手の込んだこの種雑誌の随一のものであると思うが、その見出し語となったものは、いずれもタイトル中に表現されたものを用いている。

さらにそれより約80年も前の Journal des Économistes. Paris の次3の論文についてみよう。

- Fix, T.: De la mesure de la valeur. Tome 9 (1844)
[Anon.]: Definition de la valeur et des lois qui la reglent. Tome 18 (1847)
Walras, A.: Analyse de son Mémoire sur la valeur échangeable. (Tome 24 (1849))

Table alphabétique générale des matières (années 1841-1865). Paris, 1883に valeur のもとにあたかも KWOC の如く配置されている。

Valeur. De la mesure de la—, par Th. Fix, IX, 1, —Definition de la—et des lois qui la reglent, XVIII, 385. —Mémoire de M. Walras sur la—échangeable, XXIV, 377.

以上のように古い歴史をもつこれらの手技が、コンピュータによって甦ったかのような錯覚さえ起って来る。

さらに先に触れた Social Sciences Citation Index は「言葉でしらべる (Permuterm)」、方法としてタイトルの重要な語彙 (あるいはキー・ワード) を「組み合わせ (Permuted)」によってより適確なものを探そうとしている。

筆者が日農索の第5巻, 第1号より一定の型をきめて, 100 アイテムの文献を抜き出し, そのタイトルによって, これと思われる標目, 重出を紙片に記入した後, 改めて索引により, 十分検索し使用されている標目を抜き出してみた。(第8表)

第8表 日農索総索引とキー・ワードとの比較

	木田橋の与えた見出し語			索引より探索した見出し語			備考
	合致した語(索引)	補った語(重出)	疑問のもの	合致した語(索引)	補った語(重出)	疑問のもの	
文献 1—50	87	15		89	7	9	
51—100	111	20	1	112	9	6	
計 100	198	35	1	201	16	15	

注: この計算は概略のものであって, 「合致した語」についても主題に結びつくものを計算した。筆者の欄に疑問のものがないのは初めから疑問のものは除いた。その後, 発見されたものが1つあった。

もっとも日農索は, 索引説明にあたり, 「見出し語は, ほとんどすべて, 採録文献の標題中から採り, 索引作成にさいして, 文献の本文にあたったものは, ごく少数にとどまる。」とことわっている。それにしても短時間 (明確な時間はとらなかつた) で198に対し201の僅か3の誤差であった。

さらに季報64/65—67号までの最多収容項の農業文献 (図書を除いた121, 110, 107編) について, どんな主題のものがあるか, あるいは分割できるかについて試みたのが第9表である。

この見出し語 (標目) は46あるが, 農業—アフリカの地域あるいは国家はもっと簡単にまとめられる可能性もあり, またその他という項もつけず, そのままを記録した。この3号で64/65号の農業組合の19編が最高で, 計としてもこの項目の37編がトップであった。

第9表 キー・ワードを用いた農業文献の分割

	64/65	66	67	計		64/65	66	67	計
農業					農業開発	3	10		13
米穀	10	1	5	16	農業経営	9	3	2	14
米作(稲作)	2	7	10	19	農業近代機械化	4	13	1	18
地域開発		6	1	7	農業金融	8	6	8	22
畜産・酪農	4	4	5	13	農業公害	1			1
畑作	1	2		3	農業組合	19	6	12	37
肥料	1	2		3	農業問題	2	2	3	7
果樹・園芸	1	1	5	7	農業労働	3	5	4	12
穀物	3			3	農業生産	3	3	2	8
農地	2	8	6	16	農業政策	5	8	6	19
農地—土地問題	1		4	5	農業組織・構造	3	3		6
農地—土地改良	3	1	1	5	農業—家庭	10	5	13	28
農業	15	8	12	35	農業—民	10	6	3	19
—アフリカ	1	1		2	農産物	8	5	5	18
—アメリカ合	3	1		4	農村		6	5	11
—アジア	2		1	3	農村都市化	5	2	5	12
—中国	2		1	3	栽培	1			1
—キューバ	1			1	青果物		1	6	7
—ヨーロッパ	2			2	職業移動	1			1
—西ドイツ		1		1	食糧	1	3	5	9
—フランス	1			1	水	3	1		4
—日本	10	9	3	22	養蚕	4			4
—ペルー	1			1					
—ソ聯	2	2	1	5	人名(横井ほか)	9	7	3	19
農業団地	4		1	5	計	184	149	139	472

第10表 第9表の集計

号	図書を除いた文献数	標目分	重出分	計	記入時間※
64/65号	121	121	63	184	55分
66	110	110	39	149	61
67	107	107	32	139	50
計	338	338	134	472	

※2～7字までの標目と文献番号を紙片の記入に要した時間。

3号計の338編の論文を46標目に収め得たとすれば、仮に3号分の総文献数は5,430編であるから、この率では細標目を含めて738標目に収められることになろう。これは全くの1試算である。

お わ り に

以上各項にわたり述べたが、これは既に協議会ニュースにあるいは編集委員会において討議ずみのもので、作業量と将来の文献激増の傾向と、さらに利用者の便をも加え考慮するならば、明白な結論を得ることと思う。

また昭和43年以来、各本季報についての関係文献には必ずずという位にいわれていることは、各類似関係索引との相互協力によって、おのおのその特徴を生かし、分担して編集することを数年間提案し続けているが、これの困難さは同じ法律関係索引が、2官庁によって続けられている現状でもわかるように、わが国の特徴であるとも思われる。

またこの事業はかつての「経済・法律文献目録」のようにまた、法律（関係）雑誌記事索引のように国の一経済研究所の事業としてもよい性質のものと考えられる。

極めて断片的ではあるが、季報の今後の進展に多少参考資料となれば望外の幸いである。

延々になって編集者にご迷惑をお掛けし、また経済学文献季報の飛躍的な発展を切望のあまり、数々の暴言と併せてお許しをお願いいたして筆をおく。

文 献

- 1) (1)は経済資料研究 8, 1—14 (11, 1974)
- 2) 竹林庄太郎：経済資料協議会編、「経済学文献季報」；同志社商学 8(3), 302—306 (10, 1956)
- 3) 経済資料協議会協議会ニュース No. 14, 2 (1, 1973) によれば2月初旬に66号が刊行される予定であった。
- 4) 経済資料協議会協議会ニュース No. 11, 3 (1, 1972)
- 5) 上掲協議会ニュース No. 12, 2-3 (5, 1972)
- 6) 上掲協議会ニュース No. 15 (7, 1973)
- 7) 木田橋喜代慎：総説論文—文献探索の手がかりとして—；北海道図書館研究会会報 20, 74—99 (2, 1970)。なお最近国民経済雑誌にレビュー・アーティクルという欄が設けられているが、これは筆者のいう総説論文 (Review article) ではない、このレビュー・アーティクルは American Economic Review の Book review の長文のものに付せられた独特の呼称と思う。総説論文には

引用文献が全くないということは、特別なものを除いてはないようである。経済学の分野では *Survey of Economic Theory. London and New York* に掲載されている各巻 4, 5 編のものが、同書 Vol. 1 の序文に述べられているように Review article である。Vol. 3 に掲載されている J. R. Hicks: *Linear theory*, 37頁の論文に30アイテムの引用文献がつけられているのが特別ではないだろうか。これは極めて新しい、あるいは特殊主題であるために文献がないのか筆者にはわからないが、本シリーズの唯一のものであったと思う。

- 8) 山田秀雄：経済関係文献の調べ方；*学術月報* 17 (10), 535—536 (1, 1965)
- 9) 20年を顧みて〔座談会〕；*経済資料研究* 5, 34—63 (6, 1972)。松田芳郎、川原和子発言。
- 10) 細谷新治：経済学における二次資料の現状；*学術月報* 17 (10), 533—534 (6, 1972)
- 11) *Social Sciences Citation Index* —利用の手びき—；(紀伊国屋書店) *SCI: SSCI Report. No. 4, 1-13* (1, 1974)
- 12) 地域情報検索網研究会：図書館・情報科学文献書誌 全2巻 札幌, 同会〔北海学園大学木田橋〕1974, xix, 396; vi, 100 (社会科学のための KWIC 索引叢書 4) 北海道における大学・公共図書館に所蔵する関係文献 (洋単行書) 1,785点について、第1巻, 121—271頁に KWIC 索引を作成した。なお、この KWIC 索引には *Encyclopedia of Library and Information Science*, Vols. 1-10 までの各項 616 アイテムをこの索引に打出した。この研究代表者は松田芳郎 (一橋大学助教授) で、このほか *Main Bibliography; Classified 1, KWIC Index 119, LCSH Index 273, Chronological Index 309, Title Index 331, Author Index 361, APPENDIX; Stopwords Index 393 p.* が付されている。この試験研究は文部省ならびに北海道科学研究費によった。